

## ラオスへの旅

2007年(平成19年)8月

筈 廣 啓 史

東南アジアの活力が好き、アジアとりわけ東南アジアへは以前から関心があった。その中でも、タイやラオスへの思いは格別である。日本タイ教育交流協会や日本タイクラブ等の活動にも数年前から関わっている。とはいえ、仕事の関係で訪問することはなかなか大変である。夏・冬の休みのどちらかに5~6日何とか現地にとという状況を毎年繰り返している。

「今夏はラオスに行こう。」と決めたのは4月の終わり、タイへ行く日本人は多いが、ラオスはやはり「遠い国」、これまで、タイから日帰りで2度入国しているが、宿泊は初めて、わずか4日間の旅ではあるが、ラオス社会をじっくり見ようと期待をもって8月9日の午前1時30分、関西空港を飛び立った。

タイ語を少し勉強しているが、会話ができる訳ではなく、ラオス語はタイ語に似ているという知識だけ、そこは今までの経験でタオライ(いくら・価格)と数字、ナリカ(時刻)等の僅かの単語で乗り切るつもりで出発した。

バンコクまで約6時間、早朝に到着し、広いスワンナプーム空港内を徒歩での大移動と2時間の待ち時間でビエンチャン行きに搭乗、約1時間で到着した。ビエンチャンのワットタイ国際空港はまだ新しい、荷物を受け取る前にトイレに入ると、何と「上を向いて歩こう」のメロディが流れているのにビックリ、まずはホテルへ、タクシーは公定料金で市内まで6ドルとのこと、よくよく考えるととてつもなく高い料金、トゥクトゥク(三輪タクシー)も市内は3万キープ(約360円)、ビエンチャン市内はタイと比べても交通料金は高く感じる。

ラオスでの使用通貨は米ドル、タイのバーツ、ラオスのキープで、場所によって使い分けが必要で、サイフの中は3種類の通貨で、それぞれの金種もあり、いろんな紙幣で訳がわからなくなるほどである。

初日は市内を回る。5年前にタイのノンカイから友好橋を通過して入国したが、その時は、「アジアで一番静かな首都、交通警察はいない、信号はない」と言われていたが、たくさんのバイクと車、信号もある。自分の乗ったトゥクトゥクが、交通警察に違反で止められるというハプニングも経験し、けっしてゆったりした雰囲気ではなかった。名所タートルアンの周りも整備され、パトゥーサイ(戦没者慰霊塔)の上からの展望も変わっていた。帰国してから5年前の写真と比較してもその変化に驚かざるを得ない。道路工事はいたるところで行われており、街灯が十分でないため、知らない道の夜間の歩行はきわめて危険である。ガイドブックで朝鮮レストランを見つけ、19時頃に入店、17時半に開店だが客は誰もいない、自分一人、早速メニューを持ってきてもらったが、店内にいる5~6人の女性はすべて美人でスタイル抜群の人たち、「冷麺」を注文するがデザートも付き、現地ピョンヤンと全く同じと、日本語も理解して説明してもらった。結局、最後まで客は一人で、帰る際に、美女たち全員に挨拶してもらい、やや緊張した。「ラオスと北朝鮮は友好国」で

あることを認識した。

夜、ホテル近くにあったマッサージ店へ、タイマッサージを頼んでいる客が多く、メニューにあったラオマッサージを頼んだのは自分一人のよう、唯一別室に案内される。タイマッサージより、柔軟体操的な内容が多かった。60分みっちりやってもらって4万キープ(約500円)申し訳なくて、チップを多めに渡す。

翌日は、バンビエンに行こうと日系の旅行社へ、車の手配を依頼したが、ビエンチャン・バンビエン間は外務省の危険情報が出ており、出せないとの返事、現地の定期バスも考えたが、旅行社の勧めもあり世界遺産のルアンパバンへ行くことにした。飛行機はプロペラ機、60人位が定員、狭い搭乗口を前かがみになって機内へ、飛行高度は低いので、街の様子等がよく見える。約40分でルアンパバンに着陸した。街までのタクシーは5ドル、やはり高い、ホテルは街の外、荷物を置いて早速トゥクトゥクで市内へ、今度は1万キープであった。まず、最も有名なワットシェントーンへ、見学の後、出口の前がメコン川、若い船頭からパークウー洞窟へ行かないかと声をかけられる。料金は25ドルとか、洞窟は興味があったが、一人旅では無理とあきらめていた。往復の所要時間は4~5時間とガイドブックにある。10人乗れる船に客一人、雄大なメコン川を遡る船旅に出発する。ちょうど雨季であり豊かな水量、川幅は何百メートルかわからない、ともかく広い、途中バーンサーンハイという酒を造っている村に立ち寄り、一軒の家で22歳という機織り中の娘さんの写真を撮り、本を指さしながらのラオス語、タイ語と片言の英語と手振りで「会話」、織っていたスカーフを3つ購入した。再び洞窟へメコン川の旅を1時間、洞窟は船を降りて20分ほど登ったところ、入口に2人の娘さんと2~30人くらいの子どもたち、裸足の子もいる、子どもたちは捕まえた小鳥を籠に入れて、買ってもらいたいのである。娘さんは、懐中電灯のレンタルをしている。5千キープで借りる。洞窟を出てくると雨で、雨宿りの間、娘さんの名前と年齢を覚えてもらう。16歳と17歳、これが仕事だと言う。17歳の携帯電話がよく鳴る。日本におきかえても電波が届きそうにない場所である。9歳という男の子が、自分がメモをするボールペンを欲しいというので、紙に使い方を教えながらプレゼント、その嬉しそうな笑顔が何とも言えない表情だった。再びメコン川をルアンパバンへ、それにしても、川岸では子どもたちが魚を捕ったりよく働いている。船のガソリンスタンドに途中立ち寄ったが、給油するのは、2人の男の子である。船を住居として働いているようである。夜、ナイトバザールへ、たくさんの店、客は外国人がほとんどで落ち着いた雰囲気、これまで、チェンマイとか多くのバザールへ行ったが、一番気に入ったというのが感想である。何店かで、気に入った記念になるものを購入した。

翌朝、4時30分に起床し、再び市内へ、目的は托鉢の見学、実際に僧侶の姿を見たのは6時頃、外国人観光客も多くいる。大勢の僧侶が一行に歩いてくる。托鉢している観光客もいるが、敬虔に托鉢する地元の人の姿は大変美しい。この光景が日常、毎日行われていると思うと、「こんな世界があるんだ。」という不思議な感覚になった。

高さ150メートルのプーシーに登る。ルアンパバンの街が一望できる。大河メコンとナムカーン川、ゆったりした街の風景である。

ビエンチャンに戻るため、空港に着く。手荷物と身体検査を終える。待合室に入るがト

イレが無い。何と外に出て行くように指示される。ドアは開けっ放し、「えっ」と思う。出入り自由、さっきの検査は何だったのか。こんな空港がまだあるんだ。本当に大丈夫なのか、不安になってしまう。

ビエンチャンから友好橋へ、トゥクトゥクでいく。5年前の風景の印象は、牧歌的であったが、全く異なっている、橋の周りは何もなかったが、たくさん的高级店ができており、建築中の店もある。喫茶店で20バーツで日本茶を飲むが、味は全くダメ、しかし、しゃれた店であった。

バンコクに戻るため、ワッタイ空港までのタクシーをフロントに依頼する。すぐに案内されると、ホテルの車、サービスかと思うと、「タクシー」「6ドル」と付いてきたフロントマンに言われる、ラオス国内にいと、外国と交流が少ない国とは思えないが、空港にいと、今の時代にこれでよいのかと思わざるを得ない。日に数便しかない国際線、その中でハノイ行が2便、プノンペン経由ホーチミン行が1便あるのが、現在のラオスの位置を表しているのだという思いをもった。

アジアで数少ない鉄道の無い国、ゆったりした国民性、まだまだ日本人には馴染みは薄い、魅力あふれる素敵な国と思っているのは自分だけなのだろうか、日本では失われたものがまだまだたくさんある、そういう国である。

あっという間の4日間であった。1時間の飛行で戻ってきた喧騒としたバンコク、隣国で同じ首都でありながら、この違いは何なのか、と考えつつ、いつかはラオス社会に浸ってみたいという思いを益々もった旅であった。